

有限会社 **エコ・ライス新潟**
 新潟県長岡市脇川新田町字前島970-100
 TEL:0258-66-0070 & FAX:0258-66-0447

クイーン倶楽部だより 2月号



Niigata DESIGN COMPETITION 2008
 第18回 ニイガタデザインコンペティション 2008

エコ・ライス新潟 大賞を受賞

新潟県と(財)にいがた産業創造機構が主催するデザインコンペで、エコ・ライスの『「はんぶん米」循環システム』が大賞(一席)を受賞。18年の歴史で食品が大賞を受賞するのは初。

デザインテーマは、「生活ブランドの確立をめざして」で、米の生産から加工・備蓄・そして賞味期限経過後の畜産への再利用の循環システムが評価されました。



Dr中村のお米の話



中村 信也(なかむらのぶや)

医学博士。東京家政大学家政学部栄養学科教授として教鞭をとり、「食と医療」の医療薬膳研究の第一人者として活躍中。

第14回 畦がない！田んぼがない！

今日は田んぼの話です。田んぼは単に田という可愛げがないので、親しみを込めてこう呼んだのでしょう。田は四角と十の字で成り立っています。十は畦を意味している象形文字です。

ところが、田の中の十がないどころか四角もないという、つまり畦がない！田がない！という経験を私はしたことがあります。皆さんはそういう経験をされたことはないでしょうか、これからちょっとした自慢話をしましょう。

舞台はビルマ(ミャンマー)です。イワラジ川を屋形船的渡し船に乗り、遡りながら風流を味わっていました。さらに風流が味わえるというところで屋根に乗り、川岸を眺めていました。所々に人が集まり何か作業をしているものが目に飛び込んできます。一体何なのだと目を凝らしてみると、どうも田植えらしいのです。人々があちこちち向いて好きなように植えているように見えます。

そこで、思わず叫びました。「田植えしているのに田んぼがない！畦がない！」川べりで稲を植えているのに畦がありません。畦がないれば田んぼが成立しません。田んぼがないのに、田植えとは、という命題にぶつかりますが、目の前で実行されているので、考える必要はありません。要はビルマ人の常識は日本人の非常識であるというだけなのです。

川岸に5〜6メートルぐらいの間隔で稲を自由に植えていました。最も水際から遠いところの稲は先が少し見えるだけです。この稲の運命は…自然任せでしょう。のどかで遠い日本を思わせる風景、デジャビュ(既見感)の世界です。遠い昔、日本に米が伝わってきた頃はあんな風景が広がっていたのでしょうか。

あるフランス人が始めて日本に来て、黄金色に輝く田園風景を見て「何と綺麗な国なのだろう」と感じたと話してくれました。日本人は米作りを芸術まで高め、ビルマ人は米に執着せずに自由につくるという国民性の違いを感じました。「米作りは日本の真髄」というお話でした。

《今回で18回目を数えるIDSデザインコンペには、今年も多数の応募がありました。食品が大賞を受賞するのは初の快挙。テレビ・ラジオ・新聞で大きく報道されました。》

《IDSデザインコンペでの表彰式で、弊社代表取締役の阿部が大緊張。真っ赤に顔が紅潮し、副賞をもらい忘れて席につき、会場が爆笑の渦に包まれました。》

《コンペ審査後に懇親会があり、出席予定でしたが吹雪で電車が止まり駅で待機しているときに大賞受賞の連絡をもらいました。》